



シュレージエン/シロンスクをめぐる闘争 : 博士論文の概要紹介と今後の展望 (二〇二一年度 シンポジウム報告要旨)

衣笠, 太朗

(Citation)

神戸大学史学年報, 38:31*-33*

(Issue Date)

2023-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100485245>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485245>



シュレージエン／シロンスクをめぐる闘争： 博士論文の概要紹介と今後の展望

衣笠 太朗

本報告では自らの博士論文の概要と今後の研究についての展望を紹介した。ここではまず博論の概要を述べたのち、今後の研究計画について順に記述したい。

博論では 1918 年から 1923 年頃までの第一次世界大戦直後の時期を扱ったが、筆者はこの時期区分を「ポスト大戦期 Post-Great War era」と名付けた。この時期、ヨーロッパ全体でロシア革命を起点に、第一次世界大戦の帰結と諸帝国の崩壊に起因する革命、騒擾、内戦、領土紛争が頻発する状況が継続していた。こうした状況は「未完の戦争 Unfinished War」とも呼ばれ、とりわけ中東欧の諸地域では、その地域住民の民族的境界線の曖昧さに起因して、1918 年以後も非常に長期にわたる困難な国境線画定と民族帰属決定の作業が継続されていくこととなる。このポスト大戦期のオーバーシュレージエンにおいて、ドイツやポーランドからの政治的独立を目指す分離主義運動が展開された。ドイツ語でオーバーシュレージエン、ポーランド語でグルヌィシロンスクと呼ばれる地域は、第一次世界大戦まではドイツ帝国の南東部に位置していたが、戦間期にはドイツ（ヴァイマル共和国）、ポーランド、チェコスロヴァキアに分割されていたドイツ＝中東欧の境界地域である。人口は 20 世紀初頭時点において 220 万人程度で、ドイツ語話者、ポーランド語話者、モラヴィア語話者、複数言語話者の混在し、また宗派的には多数派のカトリック信徒と少数派プロテスタントの対立があった。この地域は、ヴェルサイユ条約で規定された 1921 年の住民投票を経て、1922 年にドイツとポーランドに分割されることとなる。

博論における中心的な問いは以下の通りである。ポスト大戦期のオーバーシュレージエンには、旧支配国ドイツに残留するか、ポーランドもしくはチェ

コスロヴァキアへと併合される可能性しか残されていなかったのだろうか。実際の国際政治の上ではほとんど可能性を断たれていたとしても、地域住民は独自の理念や利害に基づいて行動したのではないだろうか。もしそうであるならば、どのような主張や活動を展開したのであるだろうか。そのうえで、ポスト大戦期のオーバーシュレージエンにおける分離主義運動を分析することで、国際社会の政治的決定の中でドイツ＝中東欧の地域住民がいかにして独自の政治的意志を形成し、それを実現しようとしたのかについて明らかにすることを研究の目的とした。

研究史における最大の問題点は国民史からこぼれ落ちる地域独自の政治的意思への視点が欠如してきたということであろう。この意味で、ポスト大戦期にドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキアからの独立を志向したオーバーシュレージエンの分離主義運動は有意義な分析対象である。この運動は、初期にオーバーシュレージエン委員会を名乗り、1920年以後はオーバーシュレージエン人同盟＝グルヌィシロンスク人同盟（略称 BdO-ZG）という名称で活動した。運動の特徴としては以下の三点が挙げられる。①「オーバーシュレージエン国民」の实在を主張した最初の運動 ②30万人程度が参加したという大規模性 ③「オーバーシュレージエン国民」の自決権に従ってオーバーシュレージエン自由国（国民国家）の建設を要求した。

研究視角において最もオリジナリティのある部分としては、ネイション概念の理解のためにロジャース・ブルーベイカーによる「実践のカテゴリー」と「分析のカテゴリー」の区別を採用したことが挙げられる。そのうえで、分離主義者たちがどのような自己同定と他者同定のカテゴリーを構想もしくは提唱し、それは時間的経過の中でどのように変化していったのかということを検討した。ネイションに関する議論として興味深いのは、運動の指導者であったエヴァルト・ラタチの提唱する国民概念だろう。彼によれば、オーバーシュレージエン国民はドイツ人とスラヴ人の混血によって形成された「混血国民」とであるとされ、住民投票キャンペーン期にはその国民的性質が「科学的」に確認されているとまで述べられているのである。

博論全体を振り返って先の問いに答えるならば、次のようになるだろう。オーバーシュレージエンの分離主義者にとってはドイツへの残留、ポーランドやチェコスロヴァキアへの併合とともに地域の独立という可能性が残されており、経済・政治・言語・国民などの側面から独自の利害を打ち出した構

想を提案していった。とはいえそのような方向性は、国際政治的にはほとんど実現可能性がなかったばかりか、その時々地域内外の諸条件に大幅に依存するものであり、分離主義者たちが分離独立のための首尾一貫した政策を打ち出すことは困難であった。しかしそうした状況の中でも、分離主義運動側は自らの裁量の余地が最大になった時期にはオーバーシュレージエン国民国家の独立を可能な限り訴え続けたのであり、この点に彼らの最も主体的な要求が見出せる。

最後に、今後の展望について概略のみ紹介したい。現在筆者が関心を抱いているのは、第二次世界大戦末期から 1950 年頃までのドイツ＝中東欧における人の移動・残留とその結節点としてのシュレージエンである。研究目的は、シュレージエンをめぐる住民の移動と残留を地域横断的に分析することで、これまで関係各国の国民史に分断されてきた第二次世界大戦末期から冷戦期にかけてのシュレージエンおよびドイツ＝中東欧の歴史像を刷新することにある。

研究対象は、(A)「被追放民 Vertriebene」、(B)「送還者 Repatrianci」、(C)「残留者（原住民 Autochtoni）」の三者からなる。(A) と (B) については、シュレージエンからドイツへの強制移住者（被追放民）、旧ポーランド東部領土からの強制移住者（ポーランドの公式見解では「送還者」と呼ばれた）をそれぞれ示すものとし、その移住過程および戦後のドイツ＝中東欧における分析対象者と社会の変容を史料に基づいて分析する。加えて、ここにおいては (C) 残留者も重要な分析対象となる。確かに当該地域では住民の大半が移住させられたのであるが、それでも 150 万人ほどの残留者も存在した。「未完の戦争」テーゼを第二次世界大戦後の時期にまで敷衍して考察するためにも、シュレージエンにおける人の移動を研究することは重要であろう。それゆえ、今後は上記テーマについて考察と分析を深めていきたい。